

卒業式 式辞

令和4年3月18日
大阪市立敷津小学校

なつかしき 敷津の桜 いざさらば

校庭の桜の蕾がだんだん膨らんで参りました。第69期生の皆さん、ご卒業誠におめでとうございます。この6年間本当によくがんばり、無事卒業の日を迎えることができましたことを、心からお祝い申し上げます。

そして今回残念ながら卒業式に参加できずにリモート参加となったWさん。卒業式の雰囲気は届いていますか。人一倍、卒業を盛り上げる準備をがんばっていたWさんなので、今回参加できないこと、さぞやくやしいかと、衷心より申し上げます。後日、卒業証書は必ず手渡しいたしますので、今日は画面越しにご参加くださいますよう、よろしく申し上げます。

このように、最後の2年間は、新型コロナウイルスの感染予防のため、従来とは全然違う学校生活となりました。本来でしたら、昨年度は5年生としてこの卒業式を見て、心構えなども作っていきけるはずなのに、それもかなわず、いきなりの卒業式となり申し訳ないと思っています。また他にもいろいろな学校行事や地域行事が短縮、中止となってしまいました。そんな小学校生活の最後の2年間ではありましたが、皆さん方はこのような状況にも心折れることなく、日々たくましく、そして明るく元気に過ごせていたように思います。

伊勢、志摩への修学旅行の時の仲間思いで優しさあふれる皆さんの集団行動は今も忘れる事はありません。先日も一緒に枚方パークの卒業遠足に行きましたが、その時も大変立派でした。朝の地下鉄御堂筋線、超満員だったのですが、校長先生の周りにい

た6人の児童は、誰1人文句を言うこともなく、それどころかはじめはみんなリュックを背中に背負っていたんですが、だんだん混んでくると他の人の迷惑になってると感じたのでしょうか、校長先生に言われることもなく1人また1人とリュックを前にして、他の人に迷惑をかけないという行動が自然とできていました。

この先生に言われることもなく、正しい行いが自然とできることがとてもすばらしいと思います。校長先生も30年以上教師をやってきていますが、こんな光景はめったに見ることがなく本当に感動しました。もう4月からは立派な中学生になれますね。

そんな皆さんに、卒業の饞としてひとつお話をしたいと思います。

先ほども申しましたが、校庭の桜がもうあとしばらくで、きれいに咲くかと思えます。この桜に関して中学校2年生の教科書の国語の教科書にこんな話が出てきます。大岡信(まこと)と言う人の「言葉の力」と言うお話です。どんな話かといいますが、大岡さんが京都を旅行していた時に、草木染めの専門家の志村ふくみと言う人に出会います。草木染というのは、その名のとおり、草や花から色を絞り出して、布を染めることです。

その志村さんの工房を大岡さんがたずねたときに、とてもきれいな桜色の着物を見せてくれました。どれぐらいきれいな色であったかを、大岡さんはこのように綴っています。

『そのピンクは、淡いようであり、しかも燃えるような強さを内に秘め、華やかでしかも深く落ち着いている色だった。

その美しさは目と心を吸い込むように感じられた。

「この色は何から取り出したんですか。」

「桜からです。」

と志村さんは答えた。

素人の気安さで、私はすぐに桜の花びらを煮詰めて色を取り出したものだろうと思った。しかし、実際はこれは桜の皮から取り出した色なのだった。あの黒っぽいごつごつした桜の皮からこの美しいピンクの色が取れるのだという。』

そう、桜色は桜の花からはとれません。こげ茶色でごつごつした桜の小枝や木の皮を鍋に入れて、ぐらぐら煮だすと紅茶みたいな色の煮汁ができます。そこに、真っ白な糸を浸すと、不思議なことに、淡く匂い立つようなきれいなピンク色、桜色に染まるのです。とても不思議です。

しかも、その桜の枝は一年中いつでもいいというわけではなく、3月のこの時期、ちょうどもうすぐ桜の花が咲く、枝先には桜の花のつぼみがあるような枝を、ごめんなさいと念じつつ切り落とさないといけません。

冬のあいだ、桜は単なる枯れている樹木ですが、その体内には花の色となるピンク色の成分をどんどん貯めているのです。3月にもなるとそれがさらに濃くなって、桜の身体中に充満してきます。そして、積算温度が600度を超えた頃に、細い枝先からピンクがあふれでるかのようになり、花が美しく咲くのです。

そこで大岡さんは、はっと気づきました。そうかこれは言葉も同じだと。

言葉というのは口から出ていますが、それは決してそこだけでうまれたものではなく、頭で考えたり、心で感じたことが、言葉となって口からでてくるのです。大岡さん

はこのように書いています。

『このように見てくれば、これは言葉の世界での出来事と同じことではないかという気がする。言葉の一語一語は、桜の花びら一枚一枚だと言っている。一見したところぜんぜん別の色をしているが、しかしほんとうは全身でその花びらの色を生み出している大きな幹、それを、その一語一語の花びらが背後に背負っているのである。』

この大岡信さんの話を読んだ、群馬県の山奥にある藤原中の生徒が感動して、志村さんに「僕たちも志村さんのように桜染めをしてみたいので、教えにきてください。」とお手紙を書いたそうです。すると志村さんは、せっかく中学生がそう言ってくれているんだからと言って、あるときこの藤原中に行ったそうです。もちろん季節は桜が咲く直前のこの時期です。

そして、いよいよ藤原中の生徒と志村先生の大実験が始まりました生徒は雪山に入り、桜の枝をたくさんとってきました。そしてそれを細かくして、大きな寸胴鍋で煮だしていきます。温度、時間、お湯の量などを間違えようとまく染まらないので、志村先生も細心の注意を払っていました。

2時間ほど桜の小枝を煮て、お湯がどんどん茶色くなって紅茶みたいな色になってきました。志村先生も、「今だ！」と白糸の束をそこに浸します。

ゆっくり糸束を鍋の中で泳がせ、頃合いをみて静かに引き上げます。

寸胴鍋を囲んだ中学生は固唾をのんで見守っています。

匂い立つようなきれいなピンク色に染まった糸束がでてくる出るのでしょうか。

そーっと志村先生が糸束を引き上げますと、なんとピンクの桜色ではなく赤みがか

った黄色にそまっていた。「アー！」「どうということ！」と中学生たちもあっけにとられています。

何より志村先生が一番驚いていました。手順に間違いもなく、桜の小枝でいつもの紅茶色の煮汁ができて、いつものように染めただけなのに、なぜ黄色くなったのでしょうか。

落胆しきっている中学生に志村先生は何度もごめんねと誤り、藤原中の校長先生にも事情を説明しました。せっかく楽しみにしていた中学生を裏切ったような形になってほんと申し訳ありませんとお話しますと、校長先生は、それは志村さんのせいではないですよ。たぶん、ここらの桜は、京都のようなピンク色に咲かないからじゃないでしょうか。「え、どんな色で咲くのですか。」「この桜の大半は黄桜で、黄色い桜の花が咲くのです。」

その話を聞いて志村先生は一層深く落ち込みました。「そうだった、桜染めは小枝の色で染まるのではなく、花の色で染まるのだった。そして、ここらへんの桜が黄桜だということがわかっていればこんな失敗にならなかったはずなのに。」と、自分の不注意さを反省し、大変悔やんだそうです。

そして「自分がきちんと勉強していなかったばかりに、中学生に大変ご迷惑をかけてしまった」とお詫びのお手紙も書いたそうです。

志村さんは今年で97歳になるのですが、このこともあって「人間は死ぬまで勉強しなくちゃいけない。」ということを中心に誓っているそうです。

みなさんも、小学校を卒業したからといって、勉強が終わるわけではありません。中学校、高校と続くのですが、勉強は一生して

いくものだとということ、桜の花を見る度に思い出してください。

最後になりましたが、保護者の皆様方、この度はお子様のご卒業誠におめでとうございます。ここまでの子育て本当に大変だったと思います。特にこの2年間はいろいろイレギュラーなことが多く、言葉にならないようなご苦勞をされたことと、また温かく学校教育を支えていただきましたこと、高いところからではございますが、心より感謝申しあげます。ありがとうございます。

では卒業生の皆さん、名残はつきないのですが、お別れの時となりました。皆さんの素敵な行動や振る舞いは、必ず下級生に語り継いでいこうと思います。先生に言われる前に、自分たちで正しい行動ができた伝説のような6年生が敷津にいたんだよと。

それでは、この敷津小学校で学んだことを活かして、中学校でも元気に頑張ってくださいよう心よりお願いを申し上げ、お祝いの言葉と結びます。

令和4年3月18日

大阪市立敷津小学校 校長 原雅史